

皆なで勝利を

分がちあいたい

山田貴久さん（しゅうさき）



3月愛知県で開催された、全日本学校選抜ソフトテニス大会でベスト16に入りました、山田貴久さんに話を伺いました。

山田さんは、上三川中学校在学中にソフトテニスを始め、現在は県立真岡高等学校の3年生で、インターハイ優勝を目指して練習に励んでいます。高校生離れた身体能力は、顧問の馬場先生によると「学年でスポーツテスト一番です。」とのこと。ラケットを持った練習以外にも筋力トレーニングやストレッチなどで自己管理をしています。また、テスト期間中でも必ず3日間は練習をしていっています。

試合を行うコート上は予想以上に悪条件で、特に夏は40度から50度に

今月の輝ける星

もなり、1日に決勝まで勝ち上がる時には7試合も消化しますが、顧問の馬場先生との出会いで選手として開花した山田さんは、「毎日ソフトテニスするのが楽しい。」しかし、苦しいことは、「基礎が身につけていないため、地味な基礎練習をすること。」と自己分析し、嬉しいときは、「試合に勝ったときです。」と話してくれました。

5月10日に開催された関東大会県予選では、団体・個人戦ともに関東大会出場を決め、「2人で競技をするので、自分は前衛を守っていますが、ミスは少なく、後衛の選手と話し合い、作戦を練り実行する力を強化したい。」と、いま以上に練習をし、パートナーとの信頼関係を築き上げることが、課題点として挙げていました。

今後の目標は、「インターハイに出場し優勝すること。でも、個人戦より団体戦で勝利を分かちあいたい。」と熱いまなこで話してくれました。



今月の農産物はインゲンです。

J Aうつのみやインゲン専門部会の副会長であります上野泉さん（井戸川）にお話を伺いました。

現在、町では22人がインゲンを生産、3品種を出荷しており、県内でのインゲンの出荷率も非常に高いとのこと。上野さんは「マンズナル」という品種を生産しています。

「マンズナル」はインゲンの部類の中でも大きく、長さが20cmを超えます。東北での消費割合が高く、名前の発祥についても岩手県の方言で、「まんずいっばいなる（たくさん実がなる）」から来ており、収穫期になると実が取りきれないほどになるそうです。

4月から6月が出荷時期で、定植してから60日程で収穫ができます。

上野さんのお宅では、春にインゲン、夏にナス、冬にニラを生産しており、特にインゲンは、「病気に強いので、扱いやす



わが町の農産物

インゲン豆 編

く効率が良い。」と話してくれました。心配な点は虫がつきやすいため、害虫対策に一番気を使うとのことでした。



出荷のほとんどが東北方面のため、県内の食品売場には、なかなかお目見えできない状況ですが、調理方法は、「煮物、天ぷら、ごまあえなど、甘みがあり、歯ごたえもシャキシャキしています。特に茹でてマヨネーズをつけて食べるのがおいしいですよ。」また、栄養価も高く、ビタミン、食物繊維が豊富で、「美肌効果と便秘解消に最高です。」と教えてくれました。

そんな上野さんも、数年前までは会社勤務をしていましたが、両親の介護のために退職し、農業に従事しています。一番辛いことは、「生産量を増やしたいが、家族労働に限界がある点。」しかしながら一番喜びを感じるのは、「生産したインゲンが、美味しそうになっているのを見るとき。」と笑顔で話をしてくれました。